

# NEWSLETTER #120

p.1 第31回 JASPM 年次大会の開催と発表募集について

p.3 2019年度第1回関西地区例会報告 ..... 輪島裕介

p.5 2019年度第1回関東地区例会報告 ..... 大久保真由・三間美知太郎・若宮花瑛

## Information

p.7 事務局より

## 第31回 JASPM 年次大会の開催と 発表募集について

### 【ご挨拶】

#### 大会実行委員長 輪島裕介

JASPM 第31回大会は、2019年12月7日(土)・8日(日)に、大阪大学豊中キャンパスで開催されることになりました。

大会のタイムテーブルは、7日(土)午後に個人発表と特別企画の英語セッション、夕方に総会、8日(日)午前ワークショップ、午後にシンポジウムを計画しています。シンポジウムでは、シン・ヒュンジュン氏(韓国)、何東洪氏(台湾)、ケヴィン・フェレス氏(アメリカ)ほかをお迎えして、近年勃興しつつあるインターアジア及びアジア系アメリカのポピュラー音楽研究との関連のなかで、日本のポピュラー音楽とその研究を位置づける企画を考えています。昨年の30回大会での歴史的な総括を承けて、初心に立ち返りつつ、次の時代を展望することを目指すものです。奇しくも、2021年の国際ポピュラー音楽学会は韓国・大邱で開催されることが決定しました。1997年

の金沢大会に続くアジアで2度目のIASPM大会に向けて、国際的・学際的な研究をすすめる好機となればと願っています。

現在のアジア(系)ポピュラー音楽研究の熱気を体感し、そこに参加する最初のステップとして、7日午後の個人発表と並行して、3分間の英語発表を行うセッションを企画しています。研究キャリアや言語運用能力にかかわらず、奮ってご参加ください。

大阪は古代以来、アジア大陸への窓口でしたが、一方で、日本近代における民間主導の都市開発の先駆でもありました。大阪北郊に位置する大阪大学豊中キャンパス(元旧制浪速高校)は、20世紀初頭の私鉄沿線開発のなかで風光明媚な郊外型学園として作られた場所です。そのため、阪急梅田駅(大阪駅)から約20分、伊丹空港からもモノレールで約5分とアクセスしやすく、また自然豊かな立地です。

12月に大阪大学で皆さんとお会いできるのを楽しみにしております。

・ワークショップ：3時間

## 【発表募集】

### 研究活動担当理事 輪島裕介

本年度の大会での個人発表（12月7日(土)午後）、ワークショップ（12月8日(日)午前）の募集をいたします。発表申込書（個人発表用とワークショップ用のそれぞれのワードファイルがあります）をダウンロードし、必要事項を記載して、下記メールアドレスまで添付ファイルにて送信してください。なお郵送等による申込を希望される方は、下記の問い合わせ先までご連絡ください。申込締切（7月31日(水)）後に研究活動委員会が申込内容を吟味したうえで、発表についてのお知らせを個別に連絡いたします。

また、特別企画として、12月7日(土)午後に、3分間の英語ショート発表を行います。こちらは特に締切を設けず随時申込みを受け付けます。個人発表と重ねての応募も可能です。ご希望の方はお名前・所属と発表題目のみをメールでお知らせください。

## ■申込書類

学会ウェブサイト（<http://www.jaspm.jp/>）からダウンロードすることができます。

- ・個人発表用申込書 Jaspm31individual
- ・ワークショップ用申込書 Jaspm31workshop

上記のリンクから申込書をダウンロードし、必要事項を記載してください。

## ■今大会のプログラムについて

今大会は、第一日（12月7日(土)）午後に個人発表と英語ショート発表、第二日（12月8日(日)）午前にワークショップ、同日の午後にシンポジウムという順でプログラムを組んでおります。個人発表をする会員が、同日の懇親会で参加者と交流を深められるよう意図したものです。個人発表とワークショップの申込にあたっては、日程にご留意ください。個人発表と英語ショート発表は重ねて応募していただけます。

## ■発表時間（予定）について

- ・個人発表：30分（発表20分＋質疑応答10分）

## ■ワークショップ企画案について

ワークショップでは、一つのテーマをめぐって多角的に提起される問題について、フロアとパネルの間で時間をかけて議論することができます。ご自分の研究フィールドの意義を知らしめる絶好の機会です。奮ってお申込ください。

パネルは通常、3名ほどの発表者（問題提起者）と1名の討論者から構成されます。申込時に全員の名前を記載することを原則とします。申込時に討論者についてやむを得ず未定であるという場合は、申込採択となれば、人選について研究活動委員会より相談させていただきます。なお非会員も問題提起者や討論者になることができますが、謝礼や交通費は支払われません。

## ■申込締切

個人発表・ワークショップとも2019年7月31日(水)

※8月3日(土)を過ぎても研究活動委員会より受領の連絡がない場合には、下記の問い合わせ先にご連絡ください。

※現在非会員の方は、入会申込をされたのちに発表申込をしてください。入会申込はリンクを参照してください。[http://www.jaspm.jp/?page\\_id=90](http://www.jaspm.jp/?page_id=90)

## ■特別企画 JASPM31 英語ショート発表企画

・目的：

- JASPM 会員の国際会議発表にむけた最初の一步をつくる。なお IAPSM（インターアジアポピュラー音楽研究グループ）2020 年大会応募締め切りは 12 月末
- ブロークン・イングリッシュでの議論に親しみ、楽しむ
- 非日本語話者ゲストとの交流

・使用言語：英語

・エントリー：英語のタイトルのみ。随時受付

・形式：

- トーク3分（音源再生こみ、時間厳守）  
+ ディスカッション3分

- 250～350 ワードを目安に英語原稿を作成する  
(必須)
- トーク内容にあわせた音源を 1 曲だけ再生する  
(必須)
- スライドを使用する場合は 3 枚以内にまとめる

## ■大会での個人研究発表、ワークショップの ニューズレターへの報告に関して

大会での個人研究発表、ワークショップは、翌年 3 月発行予定のニューズレターに報告を書いていた  
く必要があります。発表の申込をなさる方はご承知  
おきください。

- ・ 締切：2020 年 2 月 7 日(金)
- ・ 分量：3000 字程度
- ・ 原稿の提出先：学会ニューズレター担当  
(nl@jaspm.jp)
- ・ 報告内容：
  - ①個人研究発表はご自身の発表の内容と質疑につ  
いてまとめてください。
  - ②ワークショップは、問題提起者や討論者以外で  
報告者を決めていただき、内容と質疑についてま  
とめてください。報告者が決まりましたら、お手数  
ですが、お名前と連絡先を、学会ニューズレター担  
当 (nl@jaspm.jp) までお知らせ下さい。

## ■個人発表・ワークショップ申込書送付先・問い合わせ 先

研究活動委員会 輪島裕介

メールアドレス yskwjm\_at\_let.osaka-u.ac.jp (\_at\_を  
アットマークに変えてご送信ください)

### 2019 年度第 1 回関西地区例会報告 輪島裕介

シンポジウム「音・機械・身体-レコードを巡る諸実践」

日時：2019 年 1 月 19 日(土) 14:00 開始

場所：同志社女子大学今出川キャンパス

純生館 3 階 301 教室

秋吉康晴氏の企画で、日本音楽学会西日本支部例会と  
の合同で行われた本シンポジウムは、「レコード」とい  
うモノを媒介項として、音及び音楽が機械的に生成され  
る仕組みや、そこでしばしば音響生成のモデルとなり、  
また表演的な発音行為を実践する主体ともなる身体につ  
いて考察する、きわめて視野の広い、野心的なものであ  
った。パネリストの城一裕氏、DJ Sniff 氏とも、実践者  
と研究者の視点を高い次元で兼ね備えた人物であり、興  
味深い実践の紹介とそれに基づく洞察が随所に示され  
た。

プログラムは、秋吉氏による「針に触れる、音を感じ  
る」と題された、企画意図の紹介と問題設定を兼ねた報  
告に始まり、城一裕氏の「ポストデジタル以降の音を生  
み出す構造」、DJ Sniff 氏の「Record as Instruments, Record  
as Traces」に続けて全体討議・質疑応答が行われた。

秋吉氏は、自身の研究テーマを「音響技術の文化史/  
文化論」と規定し、その観点から、まず「ニューメディ  
アの状況」を敷衍する。現在のデジタル/コンピュータ  
に依拠する「ニューメディア」が、「モノからデータへ  
の移行」によって特徴づけられることを指摘した上で、  
「モノ」と「データ」が、あたかもデカルトの心身二元  
論に類似するかたちで分離し、「モノ性」が感化されて  
いるのではないかと問題を設定する。そのうえで、『モ  
ノ』としてのレコード、ターンテーブル」に注意を促  
す。そこで、メディア考古学的な観点を採用し、録音技  
術の起源に遡り、エジソンによる発明の触覚的な性質を  
強調し、また、発明者によるパフォーマンスから、フォ  
ノグラフの楽器としての性質を備えていたことに注意を  
喚起する。これは、発明家、作家でもあり演奏家でも  
あり研究者でもある城氏、DJ Sniff 氏を呼び込むう  
えで、きわめて効果的な文脈設定であると感じた。

続いて城氏は、ジャック・アタリを引用した「音楽は  
社会に先駆けるのか？ それとも遅れているのか？」と  
いう問いを冒頭で提示する。それに対する答えとして、  
音響技術の進化の系統樹のなかで、次世代以降には受け  
継がれなかった「枝」にあたる部分の再検討と、そこに  
孕まれる「起こり得た別の進化」の可能性に基づく創作  
を行う、という活動の中心的な主題を示した（報告者自  
身は、氏の問題意識を完全に理解しているか甚だおぼつ  
かないのだが、そのように理解した、ということでご容

赦いただきたい)。そうした観点から、モホリ＝ナギや刀根康尚といった芸術家から、Wave Net や Acoustofluidic といった音響合成技術の先端的な動向までを射程に入れつつ、自身と、氏の研究室の学生による創作を紹介した。なかでも「紙のレコード」は、氏の代表的な仕事として、この分野に疎い報告者も知ってはいたが、その理念や創作の文脈について改めて理解を深めることができた。その技術はクリエイティブ・コモンズに基づいて公開されており、私自身も機会があればぜひ作ってみたいと感じた。また、物理モデルをデータ化したデジタル音源を再物理化する試みは、「ポストデジタル」の具体的な方向としてなるほどと思わせられ、音響信号を電極でイカに流し、色素の変化を引き出す作品から、動物の知覚に関する倫理的問題を見出すくんだりも印象的だった。

ゲストである DJ Sniff 氏は、自身の立場を DJ 音楽と実験音楽を越境し、レコードとレコードプレイヤーを楽器として用いるターンテーブルリストであると規定した上で、自身の即興的な表現や関連する諸実践について豊富な実例を基に報告した。報告者にとって興味深かったのは、「聴く」ことと「演奏」することの可逆性について、マイク／ヘッドホンの音声入出力の可逆性を参照しながら指摘し、そのことを、即興という表現スタイルと、彼が自覚的に名乗る「DJ」の音楽性と関連付けて述べたくだりである。さらに、「書く」ことをヨーロッパ的な伝統と結びつけたうえで、さらに、そこから自由に離脱する特権もまたヨーロッパ白人男性のものなのではないか、という指摘には強く膝を打った。「何にもとらわれない自由な表現者／創作者」としての「芸術家」という理念が、近代ヨーロッパ的な社会制度と規範のなかで特権化されたものであるという指摘自体は決して珍しいものではないが、ヨーロッパで長く活動する一方、香港で教鞭をとり、アジア各地の実験的即興演奏家に広く呼びかける「アジア・ミーティング・フェスティバル」を組織する氏ならではのきわめて重い指摘であると感じた。デレク・ベイリーに由来する「イディオマティックではない即興」が、ある面では「神」に比せられる自由な創造主体としての特権的なパフォーマーのあり方を含意してしまう傾向に、常々違和感を感じていた私にとって、まさに蒙を啓かれる指摘であった。

やや余談めくが、懇親会の席で、この発言を承けて、私は「先の発言でのヨーロッパ白人男性中心主義批判には深く同意するが、そこでアジアでの活動をどう位置づけるのか。結局ヨーロッパ的な規範と英語でのコミュニケーション能力を習得した現地エリートとの交流、という地点を越えることはできるのだろうか」という、非常に意地の悪い質問をぶつけてみたのだが、氏は、そのことを率直に認めた上で、「しかし音楽の場合は、とりわけ即興の場合は、言葉がカタコトであっても、また表現がカタコト的であってもコミュニケーションが成立するのだ」といった見解を示してくれた。本編終了後のことゆえ正確な文言ではないが、これも胸のすくような意見であると感じ入った。

本編に戻って、パネリストによるディスカッションでは、秋吉氏から「演奏」という行為についてどう考えるか、という問いがあり、城氏は、制作プロセス自体を一つのパフォーマンスとして提示している、と応えた。DJ Sniff 氏は、即興と録音は別であり、後者についてはコンセプトが必要だ、と応じた。そして、録音物を制作するのは一種の「物販」であり、名前を認知させるための手段である、という言葉もあった。続けて、DJ Sniff 氏から、いわゆるハイファイ志向とは逆の「ノイズ」が作品の中心となっていることの意味についての問いがあり、城氏は、素材の差や継ぎ目なども、作品を構成する重要な情報である、と応じ、秋吉氏も、「ノイズがのっている」という聞き方自体がレコードやラジオによる音楽聴取が普及して以降、事後的にできたのではないかと補足した。

フロアからの質問では、増田聡会員から、「作品」がどの水準で捉えられているか、という問いがあり、城氏、Sniff 氏の両者とも、録音物を作品と捉える立場に違和感を表明した。CD が「物販」である、という文脈で、アカデミアや文化施設も「物販」と同様の、「アーティストを守る場所」としての機能を果たしているのではないかと、という見解もあらわれた。

この日は、近隣で関連が深いイベントが多く開催されていたこともあり、絶対的な参加人数は必ずしも多いとはいえなかったが、懇親会への出席率やそこでの白熱した議論から判断する限り、きわめて質の高い聴衆を得て、大変充実したイベントであったと断言できる。私見

では、今回「音」と「機械」について、そして、音響生成のモデルあるいはメディアとしての感官についての議論はかなり深められたが、感覚統合的な共感的な存在としての身体については、まだまだ議論を深める余地があるように思われる。ぜひ今後の続編を期待したい。願わくばパフォーマンス付きで。

(輪島裕介)

## 2019 年度第 1 回関東地区例会報告 大久保真由・三間美知太郎・若宮花瑛

### 修士論文・博士論文報告会

日時：2019 年 3 月 23 日(土) 14:00~17:00

会場：武蔵大学 1 号館 4 階 1403 教室

報告者：

大久保真由（東京芸術大学音楽学部楽理科）

三間美知太郎（東北大学大学院国際文化研究科）

若宮花瑛（武蔵大学大学院人文科研究科）

発表 1：

「アニマルズ・アズ・リーダーズの楽曲における  
複雑なリズムパターンについて」

大久保真由（東京芸術大学音楽学部楽理科）

アニマルズ・アズ・リーダーズ Animals as Leaders とはワシントン D.C.を拠点に活動するバンドである。ギター 2 人、ドラム 1 人の 3 人構成で、楽器のみの演奏で構成されている。このバンドはジェント Djent と呼ばれる音楽ジャンルに分類される場合が多い。

本論文は、このバンドの楽曲「Kascade」を取り上げ、楽曲中で用いられた”ジェント的”なリズムパターンに着眼した。論文の目的は、楽曲に複雑なリズムを用いた工夫が施されている点を明らかにし、それらが聴取の際にもたらす影響を考察することである。

発表においては、まずアニマルズ・アズ・リーダーズとはどのようなバンドなのか、そしてジェントとはどういった音楽ジャンルなのかを概観した。そして Kascade のドラムパターンを譜面で表し、このリズムパターンが「ポリメトリック」に分類し得ることを指摘した。また、発表時に加えた新たな考察として、ジェントはプログレッシブ・

メタルの下位ジャンルというよりもメタルコアの要素が強いのではないかという点を指摘した。

質疑応答において挙げたご指摘・ご質問について、主な内容は以下の通りである。

(1) ジェントというジャンルの規模感について

論文及び発表の中では、インターネットでの流行の言及にほぼ留まっている。しかし、なぜジェントの中からアニマルズ・アズ・リーダーズを取り上げたのかに説得力を与えるためにも、ジェント自体がどのくらいの規模で認知・支持されているジャンルなのかについて、より具体的な説明があると良い（例えば、日本国内でジェントを自称しているバンドがいるのか、世界のどの国で人気なのか、など）。

(2) アニマルズ・アズ・リーダーズをメタルの文脈のみで論じることに對する指摘

アニマルズ・アズ・リーダーズのサウンドは、必ずしもメタルやメタルコアに括って論じることができないのではないか。メインコンポーザーであるギタリストが黒人であること、ファッションなどの様々な要素から考察する必要があり、従来の技巧的なメタルギタリストと並べて語れないのではないか。アニマルズ・アズ・リーダーズ自体は、CD ショップなどの棚分類ではポストロックなどに分類される場合もある。特定のリズムの繰り返しという点では、ニュー・ウェーブとも関連性があるのではないか。

(3) 音楽のジャンル分類を扱うことに関する注意点

ジャンル分類は、譜面に起こした音だけでは決まらず、発祥地やファッションスタイル、思想、ボーカルの声質など、あらゆる要素が絡んでくるものであり、注意が必要である。

また、いわゆる”メタラー”と呼ばれるメタルの演奏者やファンは、メタルの中でもさらに下位ジャンルの分類を細分化していく傾向があるという指摘も挙げた（この現象は EDM にも見られるという興味深い指摘もあった）。下位ジャンルを細分類していくことで、新たなジャンルを確立し、独自性を獲得する事に繋がるのではないかと思われる。

(4) リズムの効果を説明する根拠に「冗長性」という観点をを用いることに対して

参考論文として用いた榊原彩子『音楽の繰り返し聴取が快感情に及ぼす影響：リズムパターンの冗長性とハー

モニーの典型性』の正当性に関する指摘。ポリメトリックにも様々な用いられ方があり（例：ガムラン）、ポリメトリックを繰り返して続けていくリズムパターンは、果たして本当に「冗長性」を取り払えるものなのか。

また、本論文のようにリズムについて論じる上で、よりサンプルを増やして分析し、類型化いく必要がある点についても指摘をいただいた。

今回の発表では、質疑応答を通して新たな視点を得ることができ、大変有意義な経験となった。また、研究テーマ自体における課題と、論文執筆能力における課題、両方を見つめ直す大きな契機となった。今回の発表を踏まえ、今後さらに研究を進めていきたい。

(大久保真由)

## 発表 2:

### 「カントリー・ミュージックにおける白人性構築

#### —大恐慌期アメリカ中西部における人種と音楽—

三間美知太郎（東北大学大学院国際文化研究科）

本報告は、大恐慌期の中西部におけるカントリー・ミュージック（以下、カントリー）を通して、いかにアメリカ合衆国における文化が人種によって規定されるかを明らかにするものである。カントリーは、南部の民謡を商業化して発展していった音楽ジャンルである。もともと人種性のなかった南部の民謡が、いかにして「白人の音楽」としてのカントリーへと変貌を遂げたかを考察した。

まず、カントリーの起源となった南部の民謡が、いかに黒人と白人に共有された文化であったかを概観した。その後、先行研究では「白人の音楽」として語られることが多かった南部のカントリーにおいても、人種性がなかったことを指摘した。そして、その要因としては、当時南部で敷かれていた人種主義的な法律であるジム・クロー法にあったことを明らかにした。こうした分析結果から、「白人の音楽」が生まれたのは、ジム・クロー法のような人種主義的な法律の存在しない中西部であると指摘した。

次に、中西部のカントリーのリスナーとなる中西部白人農民の人種観がいかなるものだったのかを検討した。白人性概念を用いながら考察し、中西部白人農民の白人性は「アメリカ生まれの白人が真正なアメリカ人である」だったことを指摘した。

そして、いよいよ中西部カントリーが「白人の音楽」へと人種化された経緯を考察した。中西部白人農民をターゲットにしたラジオ番組等の音楽関連産業は、南部民謡をカントリーとして売り出していく。そこで、よりリスナー受けすることをもくろんだ音楽関連産業は、南部民謡をよりリスナーの価値観に近い音楽へと改変する。ここにおいて、上述した白人性も南部民謡に反映されることとなり、元々人種性のなかった南部民謡は「アメリカ開拓者の音楽」という「白人の音楽」へと変貌を遂げることとなる。

こうしたカントリーの事例から明らかになるのは、アメリカにおける文化の人種による既定の在り方である。中西部のカントリーは、リスナーとなる中西部白人農民の白人性を反映する形で、音楽関連産業によって、南部民謡に白人性が構築され、「白人の音楽」として成立していった。こうしたことから、人種による文化の規定とは、文化の受け手の人種観を踏まえた上で、文化の作り手によって行われると結論付けた。

フロアからは、ジム・クロー法がいかに異人種間での文化の共有を可能にしたか、というご質問をいただいた。報告者は、異人種間において音楽が共有された具体的なエピソードを交えながら、ジム・クロー法という絶対的な人種の規範が南部白人の人種意識を満足させ、そしてその結果として、音楽が人種的規範を体現する装置とならなかったことを説明した。また、ラジオ番組が一方的に人種を切り分けた結果、「白人音楽」「黒人音楽」が生まれたのではとご指摘もいただいた。報告者は、リスナーの人種観があって初めて「白人音楽」が成立した背景を指摘したうえで、必ずしもラジオ番組による一方的な規定でなく、むしろリスナーとラジオ番組の相互作用によって人種化が成立することを説明した。一方でカントリー・ミュージックとヒルビリー・ミュージックの語彙の変化に留意すべきとご指摘もいただき、大いに今後の研究への参考とさせていただきたく思う。

(三間美知太郎)

## 発表 3:

「パチンコ台で再生される音楽 —修士論文『パチンコ業界におけるコンテンツ消費について』より」  
若宮花瑛（武蔵大学大学院人文科学研究科）

本報告は、修士論文「パチンコ業界におけるコンテンツ消費についてより」をもとにした発表であった。近年、パチンコホールに設置されているパチンコ台の多くが、アニメやアーティスト等の既存のコンテンツとタイアップした「タイアップ機」と呼ばれるものである。パチンコ台におけるタイアップ比率は年々増加し、それらの台は毎年販売台数の上位を占めている。修士論文では、現在のパチンコを文化研究の視点から捉え、パチンコ産業がどのようにコンテンツを消費しているのかを明らかにした上で、パチンコ産業の持つ文化産業としての役割について考察を行った。

本報告では、修士論文のうち、パチンコ業界に関わる人々へのインタビュー調査と終章の考察に関する内容を主に報告した。インタビュー調査では、パチンコホール企業、遊技機メーカー、日本遊技機工業組合といった異なる立場の人々へインタビューを行った。インタビュー調査の中で、パチンコホール企業からは、AKBグループとのタイアップ機の景品としてCDを頒布するというキャンペーンを行い、それが人気であったことが語られた。遊技機メーカーからは、演出としての音を重視し、近年スピーカーの数を従来よりも増やした筐体を販売していることや、アイドルグループや映画等の既存のコンテンツとのタイアップ機を製作する場合、製作者やプロデューサーが企画に参加し、タイアップ機の演出の為に新たな楽曲や映像を共に製作するということが語られた。特に演出としての新しい楽曲の製作に関しては、タイアップ機の付加価値を高めるだけでなく、楽曲の使用料を削減するというメリットがあるということも語られた。

インタビュー調査の結果を踏まえて行った考察では、遊技機メーカー、パチンコホール、パチンコ台のそれぞれが文化産業としての機能を持っていることを示した。ワード・S・ベッカーやキース・ニーガスが文化産業を捉える上で用いた概念をパチンコ産業に当てはめることで、遊技機メーカーはコンテンツ生産の場としての機能、パチンコホールは作品の分配の機能、パチンコ台はメディアとしての媒介の機能を持つとし、今後のパチンコ業界は文化産業としての機能を強めていくのではないかと考察した。

以上の報告を踏まえ、質疑応答では、マスメディアやゲームとは異なるパチンコ台独自のメディアとしての特徴

とは何かといった質問や、既存のコンテンツのファンとの関係に関する質問など、積極的な議論が行われた。今後の研究へのアドバイスとして、プレイヤーへのインタビュー調査や、パチンコ台のテクノロジーの発展と演出の発展の関係性の比較も面白いのではないかという意見もあった。

今後は、報告会での質疑応答で頂いたアドバイスや質問の内容を踏まえ、さらに掘り下げた調査、分析を行っていきたいと思う。

(若宮花瑛)

## ◆information◆

### 事務局より

#### 1. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちでJASPMの活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から1,000字から3,000字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめ承知おきください。

ニュースレターは学会ウェブサイト掲載のPDFで年3回(2月、5月、11月)の刊行、紙面で年1回(8月)の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDFで発行されたニュースレターはJASPMウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

(URL : <http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

8月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様にPDFにより掲載しております。次号(121号)は2019年8月発行予定です。原稿締切は2019年8月10日とします。また次々号(122号)は2019年11月発行予定です。原稿締切は2019年10月20日とします。

投稿原稿の送り先はJASPM 広報ニューズレター担当(nl@jaspm.jp)ですので、お間違えなきようご注意ください。ニューズレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

## 2. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局(jimu@jaspm.jp)まで郵便またはEメールでお知らせください。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。例会などのお知らせはEメールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

## 3. 会費請求と会員のメールアドレス問い合わせについて

2019年3月に、2019年度の会費請求書類を、学会誌Vol.22(2018)と一緒に会員の皆様のお手元にお届けしました。学会誌は2018年度の会費納入者にお送りしておりますので、学会誌が同封されていない場合は、速やかに会費を納入いただきますようお願いいたします(会費納入後速やかに会誌を送付いたします)。

なお、会員の皆様には、電子メールにて随時、学会からのお知らせ「JASPM メールニュース」をお送りしておりますが、最近、メールが不着となる会員の方が増えております。そのため、会費請求書類とあわせて、会員の皆様に最新のメールアドレスの問い合わせに関する書類を同封しております。メールニュースが届いておられない会員の皆様につきましては、ご留意の上ご回答いただきましたら幸いです。

**JASPM NEWSLETTER 第120号**  
(vol.31 no.2)

2019年7月16日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会(JASPM)

会長 井上貴子

理事 毛利嘉孝・細川周平・南田勝也・  
東谷護・増田聡・鈴木洋子・伏木香織・  
輪島裕介・日高良祐

学会事務局：

〒120-0034

東京都足立区千住 1-25-1

東京藝術大学 千住キャンパス

大学院国際芸術創造研究科

毛利嘉孝研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

http://www.jaspm.jp

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：日高良祐